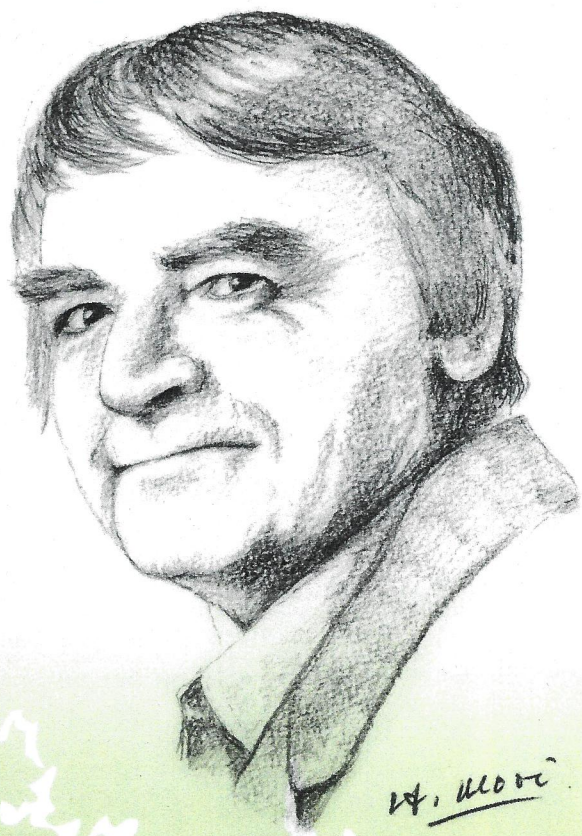


# デイヴィッド・ロツジの小説世界



意識のポリフォニー、墮とされる<sup>オーソリテイ</sup>権威

森 晴 秀 著

音羽書房鶴見書店

## デイヴィッド・ロツジへのインタヴュー

森

このたびはご多忙中に貴重な時間をお割き頂き感謝しています。インタヴューは何度か経験がありますが、あなたのような本物のイギリスの批評家、小説家にお目にかかるのは初めてで、緊張しています。

あなたのような本物のイギリスの批評家、小説家にお目にかかるのは初めてで、緊張しています。『胸にこたえる真実』の女性インタヴューアのように、相手をやりこめて有名になろうなどというつもりは私にはまったくありませんし、その能力もありません。あの作品で企まれた「逆」インタヴューなども真つ平御免です。

DL そんなことはしませんよ、大丈夫です。(笑)

—— また、『意識と小説』(二〇〇二)に収録されている、クレীগ・レーンの『考える』に関するインタヴューも内容的に高度なものですが、私にはその真似こともできません。あなたご自身はご経験が豊かなので、どうかよろしくお願いします。

DL 気楽にやりましょう。私が難聴なのに配慮してくださって、あなたの言葉が聞こえないといけない、あるいは下手な英語が私の耳に入らなかったらいけないなどと謙遜して、わざわざ質問を文字にして送っていただいているので、いや、心配はご無用。あなたの英語は補聴器を通してでもはっきりと聞こえます。明瞭な発音で、本格的な英語です、安心してください。



—— ありがとうございます。想像していたとおり、あなたはやさしい方ですね！ ではさっそく、今日の一番大きな問題の一つ、作者と語り手と、その声について。つまりあなたは作品の中で、例えば、『どこまでいけるか』のように、最初から登場人物の一人になって発言しておられる。特に巻末では、「私は現在赤レンガの大学の英文学を教え……」などの言葉で作品を終わらせていらっしゃる。このような作者の発言は、十九世紀末頃までの小説では常套手段でしたが、「作者の死」という考えが始めて以来、作品への作者の侵入は控えるべきだとも言われてきました。その歴史に照らして、あなたの作品中での作者の位置について、ご本人はどのようにお考えですか？

DL 一番言いたいことを聞いてくださった。作家は誰でもそうだが、作品の構成をどうするか、自分のメッセージをどのような方法で伝えるか、に一番時間と神経を使う。私の場合には処女作から、のちに親しむことになるミハイル・バフチンのいわゆる「ポリフォニー」、多声化に興味を持っていたので、処女作の『映画の観客』で、映画館に出入りする多数の人間たちの言葉や意識を同時に捉えることを試みた。私が被った影響で言えば、ジェイムズ・ジョイスは言うまでもないが、デイラン・トマスもそうだ。特に *Under Milk Wood* の多声的表現方法は最初から意識していた。

—— 『交換教授』や『小さな世界』でよく使われる「同時進行」的な手法ですね。広い視野から人間と社会の実態を同時に捉える。

DL そのとおり。私の場合には特に、考え抜いて到達したその結果をどうしても正確に読者に伝えたい、周到にデザインした全体像を壊さないで伝達したいという願いが根底にある。もともと、いつでも作者が文章の表面に出っぱなしで発言しているのではないことは、あなたもよく知っていらっしゃるはずだが。

—— あなたが尊敬してやまないヘンリー・ジェイムズへのオマージュといえる『作者、作者』についてはあとで触れますが、あなたのお気に入りの作品のひとつ『使者たち』の最初のページには、一人称単数の「*I*」が確か三度ぐらい出てきます。フロベールの『ボヴァリー夫人』にも、作品では一回限りですが、最初の教室の場面で“*louis*”が出る。フランス語の一人称複数ですね。『使者たち』の序文では、当時の世間や編集者がジェイムズの方法に馴染んでいなかったという不満らしい発言もあるわけで、当面は、ある程度は伝統的な作者のありようを、そのまま引きずっていかざるを得なかったかとも思うのですが、間違っていますか。

DL いや、間違っていない。それは作者の侵入というよりは、たとえ作者の位置を意識し始めていた当時だったとしても、本質的には二人とも伝統的な「語り」を眼目とする作家たちだったので、作者の存在の否定などは自分ではできなかった。一人称の単数が出てくるのもよく分かる。自分の新しい方法と世間の考え方のギャップをどのようにして埋めるかに苦勞していたはずだ。ある種の妥協はしていたのかも知れないが。

—— あなたの場合には、もつとはつきりと、例えばですが、『トリストラム・シャンディ』の作者の語りに近いと言えますか？

DL もちろん『トム・ジョーンズ』も意識の片隅にはいつもある。

—— ということは、彼らが読者を喜ばせたのと同じように現在の読者へのサービスを考えていらっしゃる？ 『どこまでいけるか』では、「親愛なる読者諸君」とか「親愛なるカトリックの読者諸君」とかの呼びかけもあって、あッ、この先生は「どこまで来たのか、いや、戻っていったのか」と驚くのですが、にもかかわらず、読者との距離はちゃんと保って、人形の糸は舞台裏で操っておられる。

DL と言っても差支えないだろうな。ただ、糸で操るという意識は私にはあまりないのだが。人物からの距離を保

つことも常にうまくいくとは限らないしね。

— というよりは人物たちと一緒に遊んでいらっしやる？

DL うまくいった時にはね。

— 次にあなたが使われる「人称」についてですが、日記形式をよくお使いになります。この日の日記は一人称ですが、翌日は三人称になっている。場合によっては一つの章全部が一人称だったり、別の章が三人称で書いてあったりしますが、これはどう考えればいいのですか？ 一人称だったら他者の視点からの批判が難しいが、三人称だったらそれができるとか。

DL あなたは自分の質問に自分で答えてしまったから、私は楽でいいね(笑)。そのとおりだが、語り手の自分に對する合の手や批判をしたくなったら、次の章や日記で三人称を使うこともある。読者の気分転換を考えているわけで、それで人称を変えることだと思っただけだ。いい。

— 「人称」のついでに言えば、自由間接語法をあなたは使われないが、その理由を私が言ってしまうとまた笑われるので控えますが……

DL いやご遠慮なく(笑)。

— この語法で個人の内面に沈積していくのは、あなたにはどうもやりづらい。真剣に誰かの内面をえぐり出そうとしているうちに、何だか馬鹿らしくなってきた、ひょいとからかってみたくなくなる。第三者の目が必要になる。『小さな世界』のザップにしても、誘拐犯から釈放されたあと、「俺には野心はもうなくなった。生きていくだけでよい」なんて弱気をパースに漏らすところがありますが、あれも直接語法ですね。ザップの性格上、内面描写は似合いませんが。一般的に言っただけ、これをあまり使わないのは、作者の氣質的な好みかも知れませんが

……

DL 私の心の底まで熟読してくれてありがとう(笑)。そのとおりだね。

— 次の話題は「ドタバタ喜劇」です。読者へのサービスタイトルでは、処女作の乙女の尿の発射音、それへのオードなどから始まり、『交換教授』の、あの完全なドタバタ喜劇、大学のリフト「パータノスター」での大騒動。

あれは作者としても大傑作だったのでしょうか？ 書いているご本人も面白かったのでは？

DL そうだね。日本語訳者の高儀進さん、何年も前に来られた時に、真つ先に乗りたいと言われたのがあのリフトだったよ。箱が上下するシャフトが二本あって、一つの箱が天辺まで達するとそのまま平衡移動して横のシャフトを降りる仕掛けだ。ザップを追いかけたあの先生は、箱が百八十度回転して下降するものと思ひ込み、横のシャフトに移る時、逆立ちして降りてくる。(笑)

— あの逆立ちも傑作ですが、誰があんな面白い名前を思いついたんでしょうね。主の祈りの最初の二語、"pater noster"をとって「パータノスター」だなんて。私も乗ってやろうと思っただけですが、今ここでテレコの係をしてくれているコールドウエルさん(元神戸大同僚)に連れて行ってもらいましたが、建物自体が改築中で、あれは撤去するんですね。

DL あれは便利だが危険だったね。

— 乗ってから「天にましますわれらの父よ」と唱える前に落下してしまっただけで間に合わない(笑)。ドアが開いたので足を踏み入れたがそこに箱がない。あつという間に地面まで転落死した悲劇も最近日本で起こりました。が……。



ドタバタに戻ります。『大英博物館が倒れる』の主人公、アダムが夜中に大英博物館の周囲を猛スピードで駆け抜けるあの場面ですが、あれを新聞記事の文体で、三人称で書くという着想はどこから来たのですか？

DL アダムは四人目の子供ができればいけないかという強迫観念で精神的に参っていた。何度も夢想したり、幻影を見るのもそのためだ。睡眠中に本人が気付かずに何かしているのかも知れないとも奥さんは言っている。あるいはセックスまでも……弱気になっているこの男が、特に赤貧で哀れなので、走った賞金まで与えようとしたわけだが、それはさておき、あの新聞記事は、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』からのヒントだ。バーバラの巻末の夢想もモリー・ブルームが手本だ。

— 世間ではあれがジョイスのパロデーだと言いますが、むしろホーマージ（オマージュ）ではないですか？

DL その方が正しいだろう。

— ジョイスの影響や恩恵に関してはいろんな箇所でお書きになっているので、私もオマージュだろうと思っていました。あなたのお母様がアイリッシュの血が半分、育たれた社会的背景も教育もジョイスに似通った所があり、ジョイスをご自分の大先達として尊敬しておられることなどもよく知っていますし、“Joyce's Choice”なる文章でもそれはよく分かります。

パロデーの話題が出たついでにお聞きしますが、あなたはジョイス以外にも実に多くの作家や作品への言及をされています。一つのことを言って、同時にその言葉に多くの他の作家、作品のことを思い浮かべるというのは、当然、バフチンも視野に入っているのでしょうか、また、T・S・エリオットの“Objective Correlative”などもあるわけですが、たとえば今出た『博物館』の場合、救え切れないほどのパロデーが利用されています。あなたに今頂いたばかりの『イギリス人以外の読者への序文』（未刊）でもその解説がされています。私が、これ

までにも疑問に思っていたことで、これをお訊ねするのは筋違いかもしれないと思いつつ、あえてお聞きしますが、この作品を出版なさる際、パロデーのことを本の宣伝文に書くこととしたが、編集者がそれに反対したので書かなかったということでした。書評にもパロデーに言及したものはなかった、ということですね。あなたの読者は、私などは別として、イギリス人でもかなり知的水準の高い人たちでしょう。批評家すら何も言わなかったということは、作者としては肩透かしに遭った、またはパロデーのレベルが高すぎた、読者にしかるべく伝わらなかつた、ということでしょうか？ これはあなたへの批判ではなくて、単純な質問です。

DL あの作品は今でも一番気に入っているものの一つなので、いい質問だが答えにくいね。「当時は」ちゃんと伝わらなかつたと言えないだろうね。

— この話題はこれで止めにしても惜しいので、もう少し続けます。『ダロウェイ夫人』は私の愛読書の一つです。『博物館』の始め近くで老婦人が歩道の縁石に立っていた時、それを見たアダムが『クラリッサ』と声を出す。この場面があったからこそ、私はあなたの小説のファンになったのです。もうひとつ、この機会に確かめておきたいのは、『楽園ニュース』の最初で、交通事故に遭った父親を乗せた救急車がサイレンを鳴らして、遠方の病院まで運んで行く場面。途中で、同じ旅行グループの人たち、といっても個人的には他人同士、の近くを車がすり抜けて走る。これはもしかすると、あの誰か分からないが身分の高い人に乗せたあのウルフの自動車か、『楽園ニュース』では不特定多数の人たちの意識は一点には集まっていないが、確かに皆がサイレンを聞いている。あの自動車のパロデーか、という印象を受けました。これは作者が意図された読み方ですか？

DL 日本人で一人、いい理解者を得たよ！（笑）

— この調子だと時間が足りなくなるので先を急ぎます。若い頃、D・H・ロレンスを読みました。あなたにロレ

ンス論があるのは知っていますが、ひとつだけ文体についての質問です。『チャタレー夫人の恋人』で、*“and she was born: a woman.”*で終わるクライマックスの一節の次のページで、(原文を見せる)このとおり感嘆符が二十数行ほどの間にたくさん付いている。あなたはロレンスのこのような文章を読んで、どのようにお考えになるのか聞かせてほしいのです。この場面での女、コニー、あるいは作者自身が礼賛しているのは男の体。これは男性崇拜を意味しているのですか？

DL 私は昔と違って、最近ではロレンスの文章とリズムがいい方向に理解できるようになっている。彼は、男性に重きを置くか否かは別として、本質的に「詩人」だった。熱狂する体質もあつたようだ。だから、あなたの指摘することはよく理解できるのだが、全面的には賛成できない。もしかすると、女性によっては、この文章が素晴らしいと感じる人もあるかもしれないね。

—— ロレンスがあと五十年長生きして、あなたの小説を読んだらどう思ったか、知りたいですね。こ奴こそ卑猥だ、発禁だと怒ったかも知れない。

DL それは面白そうだね。

—— それはさておき、『交換教授』のフィリップがザップの先妻の娘と交わる時の文章のリズムは、ロレンス的な息遣いですが、あれはそれを意識されていますね。フィリップはごく真剣なので、それを少しは冷やかしたいというお気持ちはあるのですか？ これなどもパロディーと考えていいのでしょうか。

DL やはり少しは揶揄したいという気持ちもあつたのではないだろうか。

—— 卑猥な言葉が話題になったついでに、あなたの作品では日常会話で、これが本当に大学教授の言葉か、その奥さん、例えばデジレの言葉かと、私などは実はびっくり仰天するような言葉、「股ぐら」「ペニス」「陰毛」「膣」

などなど、絶対に私などの口から出てこない言葉に出くわしますが、あなた方のような学者の世界では本当にそのような言葉が日常的に使われているのですか？ 私はかなり長くイギリス、アメリカにいた経験もあるのですが、あんな吃驚するような言葉は、たとえ大学関係者が酔っ払っているパーティーでも耳にしたことがないのですが……

DL 日本人の学者がそれを絶対に口にしないということは断言できるかどうか、私には分からないことだが、もしそうなら、それは多分、あなたが外国からの客人なので敬意を表して、あなたの前では使わなかったか、あるいは……人によっては、やはり卑猥語のみならず「性」自体が恥ずかしいと感じる人もまだいるのかもしれないね、はつきりしたことは言えないが……

—— お聞きしたいことは他にも山ほどありますが、紙面の都合もあるので、あと一つ、『作者、作者』の最終場面で、ヘンリーがやっと自分の芝居が終わりかけているはずの劇場にやって来て、いろんな方向から騒音が聞こえてくるあの場所です。

『ガイ・ドンヴィル』の最後から二番目の、マリオン・テリーの台詞、「あれは夢だったのです。でも、夢は去ってしまいました。」がまず聞こえてくる。ヘンリーはこの芝居の成果については自信がなく、落ち着けないでいたわけですから、この台詞の使い方も彼の今現在の心境を映し出すのには見事ですが、それは別として、その前後から、作者は「」を、ヘンリーがいるところ、つまり彼の意識を描くのに使わず、いないところでは使う、という手法ですね。騒がしく急転していく場面の描写をもの見事に正確にやっておられる。そして、あのクライマックスで、座主のアレグザンダーが、「作者、作者」の呼び声に遂に姿を現したヘンリーを、手招きで舞台上に上がらせてしまう。そのときヘンリーの拳動を描く文章はまだすべて「」の外側にある。ヘンリー



ーはその中に入ってはならないはずなのに、無理やり「」の中へ引きずり込まれてしまう。気がつけば、ときすでに遅し、舞台上で、お辞儀までしている。舞台上上がってからそのあとは、ヘンリーの意識に関する描写は出てこない。カク括弧付きの他人の言動だけだ。つまりヘンリーの茫然自失状態が、ヘンリーのいないはずのカク括弧「」によって非常によく描けているということになるわけですね。

あなた作品は私なりにそのすべてを、何度も読み返してきたのですが、この手法の鮮やかさと、そこに至る文章が少しも乱れず、淡々と冷静に描き込まれているその素晴らしさに、心の中で拍手しました。お見事です！

DL いやあ、褒めていただいてありがとうございます。実は、あの場面は、書評などでも評判がよかったのだが、自分でも納得できる仕上がりがなかった。ずいぶん時間をかけて考え抜いた結果だったからね。

——ところで、次の作品はもうお考えですか？

DL うん、これがカバールの色見本だ。題名は、だいぶ苦勞して考えた。

*Deaf Sentence* という。え？、「Death」と聞こえた？ やはりね！ 二つの意味と音を重ねたつもりだ。定年で辞めた難聴の研究者の話。私に似ている。父親も耳が悪い。そこからいろんなジョークを引き出す仕掛けになっている。

——やはりお書きになっていましたか(笑)。もしかすると……とは思っていたのですがね。出版を楽しみにしています。いつ頃出るのですか。

DL 来年の夏ごろになるかな。

——ところで、今日は稚拙なインタビューアで申し訳ありませんでした。あと、十数項目、質問が残っていますが、重要なものはこれでほぼ終わりました。憧れの方にお目にかかれたうえに、貴重なお考えも沢山うかがえて幸せでした。本当にありがとうございます。今後ともお体を大切になさって、読者を喜ばせる作品を書き続けてください。

DL どうもありがとうございます。

(二〇〇七年九月)